第三種郵便物認可

日本種苗新聞

売り上げ1000億円目指す

青果育種研究会・第154回品種見本市

相対取引時間の合理化に言及

見本市で自社品種をPRする種苗メーカーの担当者

横山剛司室長

青果育種研究会（岩澤均会長）は3月14日、第154回品種見本市を名古屋市中央卸売市場北部市場で開き、市場関係者や種苗メーカーなど多数が参加した。同市場では昨年10月に名果と丸市青果が合併してセントライ青果が誕生した。品種見本市はそれを記念した同青果取締役の横山剛司・営業推進室長の講演からスタート。

横山室長は、農家戸数の減少と消費者の野菜離れというダブルパンチの中で、現在の取引高を30万tから37万tにすることで、売り上げを750億円から1000億円に引き上げる目標を設定したとした。

それを達成するために素材流通プラス付加価値のビジネス、仲卸との連携強化を挙げ、利益率を上げるための合理化案を示した。

合理化案は人件費の削減ではなく、時間帯の生産性改善をその一つとして挙げた。これまでの市場取引は午前6時からのセリで始まり、午後3時には終わっていた。午後からは産地を回る余裕があった。しかし、相対取引が主流になった今では午後7時を過ぎることもあり、その合理化の必要性に言及した。

講演の後、会場には各種苗メーカーが用意した野菜の新品種などが多数並べられて、新生セントライ青果にエールを送った。

出展品目数のトップはトマト。黄化葉巻病耐病性の大玉ではカネコ種苗の「TY秀福」、タキイ種苗の「TTM-105」、みかど協和の「TYみそら86」、サカタのタネの「麗旬」。ミニでは黄化葉巻病耐病性のみかど協和の「TY小鈴」、トキタ種苗は緑でも完熟している「ミドリちゃん」、アサヒ農園は「ホワイトブラン」「ブラックナイト」が対照的な色あいを見せていた。

そのほかの果菜類では、初心者でも作れる横浜植木のミニパプリカ「ベイビーキス」、大和農園の極早生で甘みが強いフルーツパプリカ「ぱぷ丸」、アサヒ農園の単為結果のとげなしナス「ラクロ」、ナント種苗の規格外の大きさとおいしさで圧倒するピーマン「とんがりパワー」、みかど協和の貯蔵性抜群のカボチャ「蔵の匠」、雪印種苗の葉色が濃く、肉厚なコマツナの「あっちゃん」とインゲンマメの「ベストクロップ　キセラ」などが出展された。キセラは中京地区で20年間、人気を維持しているという。

葉菜類のレタスはサカタのタネの形状安定性に優れ、ビッグベイン病耐病性をもつ「パワースイープ」、横浜植木はシャキシャキ、パリパリの新触感「ハンサムグリーン」、タキイ種苗は肉厚で生食から加熱まで多用途の「ロマリア」をPR。トーホクは濃緑でよく太り、短葉で折れにくいネギの「関羽一本太」、トキタ種苗は青臭さや苦みがなく、生サラダで食べられる新感覚の「カリーノケール」を披露。

根菜類のニンジンはフルーツのような香りがするトーホクの「アロマレッド」、大和農園は即席ピクルスが楽しめる二十日ダイコンの「すみれちゃん」「あかゆきちゃん」、カネコ種苗は今やサツマイモの代名詞になっている「シルクスイート」を出展していた。